

# 宮地嘉六略年譜並著作目録

森 本 修 編

「君は天才ではなかつたが、よく六十五歳の長きを生きた。君は貧乏といふものにとこまで堪へ得られるかを以て実験した。また孤立と孤独でどこまで生きてゆけるかを実験した人でもあつた。若し君が二十代で死んでゐたら一個の労働者で終つたことになつたら。若しまた三十歳前後で死んでゐたら傷ましい一個の文学青年として終つたであらう。更にまた四十歳前後で死んでゐたら惜しむべき新進作家といはれたかも知れない。若しまた五十歳前後で死んでゐたら女房に逃げられて二児を抱へながら鬨死したといはれたであらう。更にまた、終戦前後に死んでゐたら栄養失調で倒れたといふことになつたであらう。然るに君はよく粗食欠食に耐へて今日まで生きながらへた。君の一生はまことに恵まれざる一生ではあつたが、今や二児は成人せり。君の使命は果たされたりといふべきか。以て瞑すべし。弔辭終り——」〔老残〕模擬告別式弔辭より

## 一 宮地嘉六略年譜（年齢は数え歳）

明治十七年（一八八四） 一歳

六月十一日、佐賀市唐人町三十三番地に、父林三郎、母ヨシ

宮地嘉六略年譜並著作目録

の長男として生まれた。

明治十八年（一八八五） 二歳

母ヨシがチブスに罹つて亡くなつた（享年二十歳）ことから、父林三郎は自暴自棄をおこして放埒な生活が続いて出奔したために、嘉六は佐賀市寺町に住む小林（？）タキの家へ里子にあずけられた。

明治十九年（一八八六） 三歳

佐賀県佐賀郡愛敬島村妙念寺前に住む母方の祖母吉田サカに引取られ、祖母サカと母の妹ヒサの手で育てられた。

明治二十三年（一八九〇） 七歳

祖母サカが亡くなり、叔母ヒサも嫁いだったので、その頃坂口村（現三養基郡三根村）で筑後川の防水工事に従い、内縁の妻イソと同棲していた父林三郎に引取られた。

明治二十四年（一八九一） 八歳

父林三郎はイソと別れ、嘉六が「第三の継母」とよぶノブと再婚。佐賀県神埼郡神崎町に住み、嘉六は土地の小学校に通つた。

明治二十五年（一八九二） 九歳

一家は佐賀市に帰り、父林三郎は旅館を開業した（はじめ駅前  
で若松屋と称したが、間もなく移転して屋号を二十屋と改め、更に駅  
前に移つて玉屋と更めた。土地の人は玉屋が町角に位置していたので  
角玉屋と呼んでいた）。この頃から継母ノブは嘉六を冷遇した。  
神野尋常小学校二年に編入学。

明治二十六年（一八九三） 十歳

義妹ズエが生まれたこともあつて、嘉六に対する継母ノブ  
の仕打ちは一層冷たくなり、父林三郎はノブへの遠慮もあつ  
て、嘉六を小学校を中退させ、叔母ヒサが嫁いでいた佐賀市  
松原町の仕立屋岸川松太郎方へ弟子入りさせた。

明治二十九年（一八九六） 十三歳

この年の春、嘉六は気管支カタルから肺を悪くし、父の家へ  
帰つてしばらく静養していたが、岸川方へ戻らされた。嘉六  
は病氣を理由に再び父の家へ帰つたが、下駄屋の小僧に出さ  
れた。程なく下駄屋をやめた嘉六は、佐世保海軍造船廠の職  
工をしていた嘗ての町内の遊び友達井上権八に会い、職工に  
なつて自立しようと決意して、十月末佐世保へ発つた。カン  
カン虫や、佐世保鎮守府司令長官柴山矢八中将官邸のボーイ  
として働いた後、佐世保海軍造船廠木工場の手伝い人夫（日  
給二十銭）、造船鉄工部見習工（日給十銭、後に二十五銭）となる。

明治三十一年（一八九一） 十五歳

長崎三菱造船所に入り見習工（日給二十銭）となるが、約三ヶ

月で佐世保へ戻り、町工場の鍛冶屋のサキテを経て、佐世保  
海軍造船廠製罐工場に入る（日給四十五銭）。

明治三十三年（一九〇〇） 十七歳

この年のはじめ、佐世保海軍造船廠をやめて一旦佐賀へ帰る。  
四月、創設間もない呉海軍工廠第二工場へ入り旋盤工（日給  
四十五銭）となる。呉海軍工廠に入つて間もなく、父林三郎  
危篤の報をうけて急いで帰郷したが、既に他界していた。享  
年四十二歳。叔母ヒサ夫婦は家業を継ぐことをすすめたが、  
継母ノブとの折合いを考へて断り、呉へ戻る。

明治三十四年（一九〇一） 十八歳

呉海軍工廠第四工場に入る試験をうけたが、右胸部軽微失患  
のため身体検査が不合格となり、臨時雇職工（日給七十銭）と  
なる。

明治三十五年（一九〇二） 十九歳

労働の余暇に武島羽衣、大町桂月等の美文集、大橋乙羽の紀  
行文、尾崎紅葉、川上眉山、幸田露伴、村上浪六、広津柳浪  
等の小説を愛読していたが、浪六の「当世五人男」に刺激さ  
れて、文学を勉強したい希望から上京。京橋八丁堀幸町に下  
宿し、両国橋の工事を請負っていた芝田町の富岡鉄工場へ旋  
盤工（日給八十銭）として勤めたが、約六ヶ月でやめ、石川島  
造船所（日給六十銭）へ入る。

明治三十六年（一九〇三） 二十歳

石川島造船所を約二ヶ月でやめ、神田今川町の製本屋に勤め

たが、就職一日目でやめる。八月、東京での生活に夢の破れた嘉六は、東海道を徒歩で下り、十五日目に神戸に辿り着き川崎造船所へ入ったが、約二ヶ月でやめ、一旦佐賀に帰り佐世保海軍工廠へ入る。「放浪者富蔵」は東海道を徒歩で下つた時の体験を骨子としたものである。

明治三十七年（一九〇四） 二十一歳

徴兵検査をうけて第一補充兵となる。検査後、呉海軍工廠の特別職工（日給二円）となつたが、召集をうけて下関要塞砲兵聯隊に入り、第一中隊火の山砲台守備隊に勤務中、リュエーマチを患つて衛戍病院に送られ、更に小倉の野戦病院へ移る。入院中、小説を愛読。

明治三十八年（一九〇五） 二十二歳

九月、除隊。呉海軍工廠第九工場へ入つた。この頃、火鞭会のメンバーであつた及川鼎寿を知つて、急激に社会主義思想に共鳴するようになり、文学に深い興味をもつようになった。そして、小説を読み、文章を作ることに熱中し、宮地弾丸の筆名で『呉毎日』に十五六枚の創作を投稿、「船小屋硯」「雲雀」「花のゆくへ」等が掲載された。また、同じ頃外国文学を読みはじめ、ゴリキーンに触発されて、小説家として世に立つと考へるようになった。

明治四十一年（一九〇八） 二十五歳

三月、二度目の上京。友人の紹介で舟木重雄を知り、早稲田の文科生の創作グループ「稲風」同人会に出席したりした。

また、この頃森川町に徳田秋声を訪ねた。上京後、生活の糧を求めて芝の町工場へ入つたが、父の遺産三百円が入つたので程なくやめ、従妹の世話で鍋島家邸内の長屋に寄寓して、午前中は正則英学校へ、午後は早稲田大学の聴講生として通つているうちに、遺産も残り少くなり呉へ戻つて海軍工廠へ入つた。

明治四十四年（一九一） 二十八歳

この頃、「お千代と其の母」の原型となつた五六十枚の作品を完成。

明治四十五年（一九二） 二十九歳

三月、呉海軍工廠でおこつた造兵部職工のストライキに第九工場の代表として参加。検査されて広島監獄に拘禁されたが、九月大赦令により無罪となる。出獄後、呉の商工会や新聞社に勤めた。

大正二年（一九一三） 三十歳

三月、三度目の上京。舟木との関係から『奇蹟』同人に加わる。町工場に一時勤めたが要注意人物として当局の干渉が厳しく、労働生活を続けることを断念。及川の紹介で売文社に堺利彦を訪ね、写字の仕事につく。

大正三年（一九一四） 三十一歳

五月、『牛込タイムス』という選挙新聞に勤めていた時、牛込区会議員に立候補していた坪谷善四郎（水哉）の選挙事務所まで働いていた宮島資夫と知り合う。二人は約一ヶ月の間共

大正十年（一九二一） 三十九歳

二月十二日、堺利彦の媒酌で山崎今朝弥の義妹山形俊子と結婚。十月、再刊『種



大正十年三月頃の嘉六

詩く人』創刊、執筆家の一人として嘉六の名が掲げられている。秋、本郷区駒込坂下町一五・町田方から東京市外滝野川字

西ヶ原七三二へ転居。十一月、女兒が生まれたが生後一ヶ月で死亡。十二月、長篇小説『群像』を刊行。

大正十一年（一九二二） 三十九歳

一月、俊子と離婚。九月、中篇小説『破婚まで』を刊行。

大正十二年（一九二三） 四十歳

九月、関東大震災の際、王子警察署に約十日間保護検束された。

大正十三年（一九二四） 四十一歳

水戸高等学校講堂で行われた『いばらき新聞』主催文芸講演会で水守亀之助、本莊可宗、内藤辰雄、多田文三と講演、演題は「労働文学について」。九月、深川四季子と再婚。

大正十五年（一九二六） 四十三歳

十月、東京市外滝野川字西ヶ原七三二から東京市外滝野川御

同自炊生活を送った。九月、『廿世紀』に汗の人という匿名で「鉄工場」を発表。はじめて原稿料（約四円）を得た。これを機会に『廿世紀』に入社して編集雑務を担当。次いで『新公論』に入社、訪問・創作批評を担当の傍ら、同誌に「佐吉」「帰途」「停船」等を発表。

大正六年（一九一七） 三十四歳

八月、『早稲田文学』に「其の一人」を発表、酷評をうけた。秋、牛込の下宿を引払い、本郷千駄木町の下宿に移る。食うや食わずの生活で「免囚者の如く」を書き上げ、堺利彦の世話で『中外』（大七・四）に発表、好評を得る。

大正七年（一九一八） 三十五歳

七月、堺利彦、山口孤剣等の紹介で「煤煙の臭ひ」を『中外』に発表、出世作となる。これより嘉六の名と共に労働文学の機運が急速に抬頭した。この年の暮、小川未明のもとに集まる文学グループ「青鳥会」に参加。

大正八年（一九一九） 三十六歳

十月、『解放』に「お千代と其の母」を発表、この作品のため同誌は発禁となる。同月、第一短篇集『煤煙の臭ひ』を刊行。

大正九年（一九二〇） 三十七歳

一月、『黒煙』新方針を発表、寄稿者の一人として嘉六の名が掲げられた。同月、第二短篇集『或る職工の手記』を刊行。五月、第三短篇集『放浪者富蔵』を刊行。九月、日本社会主義同盟に加盟。

代之台一三四六へ転居。十一月『新潮』に「累」を發表、室生犀星、宇野浩二の激賞をうける。十二月三十一日、長男徹郎生まる（戸籍上は昭和二年一月一日）。同月、『小説作方講話』を刊行。

昭和二年（一九二七） 四十四歳

四月、中篇小説集『累』を刊行。八月、秋永芳郎、深川正一郎、園城寺健、清藤森男、古賀残星と、宇部、福岡、佐賀、佐世保へ講演旅行。

昭和三年（一九二八） 四十五歳

三月一日、長女弥生子生まる。

昭和四年（一九二九） 四十六歳

四月、四季子と離婚。『報知新聞』連載の「愛の十字街」の原稿料で、東京市外落合町葛ヶ谷十五番地（のち淀橋区西落合一の九に地番改正）に新居をかまえ、東京市外滝野川町御代之台一三四六より移る。

昭和五年（一九三〇） 四十七歳

三月、長篇小説『愛の十字街』を刊行。

昭和十三年（一九三八） 五十五歳

三月から五月にかけて佐賀新聞特派員として中・南支に従軍。杭州、南京、蕪湖、蘇州等をまわる。十一月、随筆集『従軍隨筆』を刊行。

昭和十四年（一九三九） 五十六歳

十一月頃帰国、西落合の家を処分して再び渡支、海南島方面

をまわる。二度目の帰国後、西落合一丁目に間借りし、のち東京市淀橋区下落合三ノ一四七〇・玉翠荘に移る。

昭和十五年（一九四〇） 五十七歳

六月、『中央公論』に「覆水の記」を發表、以後昭和二十七年三月『中央公論』に「老残」を發表するまで沈黙。この頃、法律新報社の法廷記者として公判傍聴記を書く。

昭和十八年（一九四三） 六十歳

財団法人日本文学報国会の囑託となる。

昭和二十年（一九四五） 六十二歳

八月一日付で日本文学報国会事務局京橋木挽町分室長となる。終戦後より、麴町区永田町二丁目一番地日本文学報国会事務局跡跡で壕舎生活を営み、篆刻をもつて生計を立てる傍ら、發表されるあてもないままに、小説、隨筆を書き続けた。

昭和二十四年（一九四九） 六十六歳

十一月、自叙伝小説『職工物語』を刊行。

昭和三十年（一九四五） 七十二歳

十月、中央公論社創立七十周年記念事業の一つとして短篇集『老残』刊行さる。十一月二十九日、レストラン東京で『老残』出版記念会が催された。

昭和三十一年（一九五六） 七十三歳

三月、壕舎生活から東京都北区王子本町二ノ一九飛鳥山都營住宅六号へ移る。

昭和三十二年（一九五七） 七十四歳

七月、落合茂、多田文三、長崎謙二郎等の同人雑誌『文芸復興』に参加。

昭和三十三年（一九五八） 七十五歳

腎臓を患い、三月十日東京地袋の矢野病院に入院、同月末頃肝臓癌の宣告をうけ、四月十日午後七時四十分矢野病院で永眠。十一日、東中野の高徳寺で通夜、十四日告別式が営まれた。法名釈嘉祥位。先祖代々の墓所佐賀市愛敬島妙念寺に生母ヨシと共に葬られた。

六月、『文芸復興』（第九集）は「特集・宮地嘉六」を、『新郷土』（第十一卷第六号 通号一三三号）は「宮地嘉六追悼号」を刊行。

昭和三十四年（一九五九）

四月五日、佐賀市神野公園で宮地嘉六文学碑「豆腐屋は近し、手軽な自炊かな」の除幕式が行われた。

二 著 作 目 録

〔単行本〕

『煤煙の臭ひ』

四六判 三六二頁 天祐社 大正八年十月十五日発行 一  
 円六十銭

〈目次〉 免囚者の如く(一) 煤煙の臭ひ(五) 赤靴(七) 場末をさまよへる男(二二) 風の叫び(三三) 恋愛に陥るまで(四五) 甕(九五)

心の浪費者(三九) 河岸の強人(五五) 旋盤師の健吉(六九) 彼の生涯の第二期(七九) 停船(四四)

『或る職工の手記』

四六判 三六五頁 聚英閣 大正九年一月二十日発行 一  
 円八十銭 鍋井克之装幀

〈目次〉 或る職工の手記(一) 騒擾後(五) 音戸の瀬戸(九) 其の一人(一四) 二囚徒(一五) 佐吉(一九) 下駄(二五) 田舎出(三五) 帰途(四四) 鉄工場(五三) 新開港地(五三) 雙六の駒(五九) 書留郵便(三七) 第三の継母(四九)

『放浪者富蔵』

ポケット判 一六一頁 新潮社 大正九年五月二十五日発行 五十銭 〔新進作家叢書二四〕

〈目次〉 放浪者富蔵(一) 眉毛を抜く男(七) 水兵の宿(九) 竹本一座(一三) お花(二九) 適齢期(四四)

『群像』

四六判 四一六頁 太陽堂 大正十年十二月二十五日発行 二円五十銭 〔長篇小説〕

『破婚まで』

四六判 一五八頁 新潮社 大正十一年九月十五日発行 七十銭 〔中篇小説叢書 第七編〕

『小説作方講話』

四六判 二〇四頁・付録一一頁 学芸社 大正十五年十二月十五日発行 一円四十銭



〔目次〕 作家志望の人々へ(三) 小説家たるには如何なる修業を要

するか(一) 小説には師を要するか(二) 小説家たることは果して

難事か(六) 如何にすれば小説は書けるか(四) 小説を書く場合の態

度(二) いや／＼ペンを取って書き出すまで(三) 小説の書き出しに

ついて(三) 作家と見聞(三) 『温泉場スケッチ』(四) 『十二の

頃』(七) 『女理髮師』(九) 創作問答(三) 小説の会話について

(二) 諸家の文章(徳田秋声、島崎藤村、正宗白鳥、志賀直哉、武

者小路実篤、加能作次郎)(二) 自然描写について(六) 創作問答

補添(二) 付録(四) 付録・連作小説について(一) 美術の本質(四)

※巻頭に自序一頁

『果』

四六判 三三三頁 学芸社 昭和二年四月二十五日発行

一円八十銭 田中比左良装幀

〔目次〕 幻滅後(一) 素足で行く旅人(二) 結婚難(三) 果(六) 恋

※巻頭に「序に代へて」(私は文壇の野党である、小説は人生の大辭

書だ、私の内部的生活の三期) 七頁

『愛の十字街』

四六判 四六六頁 改造社 昭和五年三月発行 一円五十

銭 〔長篇小説〕

『從軍隨筆』

四六判 一三二頁 赤塚書房 昭和十三年十一月十五日発

行八十銭

〔目次〕 頼まれざる從軍(一) 杭州(五) 江南平野(七) 南京(七)

蕪湖(七) 蘇州にて(二) 前線からの帰途(二) 著者による挿絵十

七葉あり

『職工物語』

B 6判 一五六頁 中央労働学園 昭和二十四年十一月三

十日発行 百十頁 〈自叙伝小説〉 巻頭に山川均、山川菊榮

の序

『老 残』

B 6判 二五四頁 中央公論社 昭和三十年十月三十日發

行 三百五十頁 小穴隆一装幀

〈目次〉 老残(一) 八つ手の蔭(四七) 奇遇(八九) 黒革の折りカバン

(三七) 新後家(五五) 吳(七九) 巢立鳥(三九) あとがき(五五)

〔全集所収作品〕

『日本小説集』第一集

四六判 新潮社 大正十四年六月六日発行

〈所収作品〉 やきもち

『日本小説集』第三集

四六判 新潮社 昭和二年五月十二日発行

〈所収作品〉 第二温泉場スケッチ

『日本小説集』第四集

四六判 新潮社 昭和三年五月二十日発行

〈所収作品〉 軍港風景

『日本小説集』第五集

四六判 新潮社 昭和四年五月十二日発行

〈所収作品〉 新開町スケッチ

『新興文学全集』第五卷——宮地嘉六・加藤一夫・藤井真澄・新井紀一集——

四六判 平凡社 昭和四年十一月五日発行

〈所収作品〉 或る職工の手記 赤シャツの仲間 生活の沼

客 河畔 豆腐屋の笛 放浪者富蔵 自伝

『現代日本小説大系』第三十二卷

四六判 河出書房 昭和三十一年五月十五日発行

〈所収作品〉 竹本一座 煤煙の臭ひ 彼の生涯の第二期

『現代日本文学全集』85——大正小説集——

菊判 筑摩書房 昭和三十三年十二月二十日発行

〈所収作品〉 煤煙の臭ひ

『創作代表選集』第二十一卷——昭和三十三年下半年——

四六判 講談社 昭和三十三年四月十五日発行

〈所収作品〉 王子権限抄

『現代日本文学全集』88——昭和小説集(白)——

菊判 筑摩書房 昭和三十三年八月二十日発行

〈所収作品〉 老残

『日本文学全集』——名作集(一) 大正篇——

B 6変型判 新潮社 昭和三十九年十一月二十日発行

〈所収作品〉 騒擾後

〔雑誌・新聞掲載作品〕

〈小説〉

大正三年(一九一四)

鉄工場  
 大正四年(一九一七)  
 佐吉  
 大正五年(一九一六)  
 婦途  
 大正六年(一九一七)  
 卒塔婆の家  
 窮迫と幻想  
 停船  
 其の一人  
 足跡  
 大正七年(一九一八)  
 免囚者の如く  
 赤靴  
 煤煙の臭ひ  
 場末をさまよへる男  
 風の叫び  
 大正八年(一九一九)  
 変態に陥るまで  
 甕  
 心の浪費者  
 河岸の強人  
 彼の生涯の第二期

廿世紀 9  
 新公論 2  
 新公論 10  
 洪水以後 2  
 日本評論 5  
 新公論 7  
 早稲田文学 8  
 新潮 9  
 中 外 4  
 新日本 5  
 中 外 7  
 雄 弁 10  
 新時代 11  
 雄 弁 12  
 文章世界 2  
 新時代 2  
 中 外 3  
 雄 弁 5  
 騷擾後  
 下駄  
 或る職工の手記  
 音戸の瀬戸  
 お千代と其の母(翁禁)  
 二囚徒  
 雙六の駒  
 新開港地  
 第三の継母  
 大正九年(一九二〇)  
 放浪者富蔵  
 眉毛を抜く男  
 お花  
 水兵の宿  
 竹本一座  
 適齡期  
 紺屋の姉妹  
 悪夢の思ひ出  
 二人の髻男  
 城下町へ帰つてから  
 佐藤中隊長の一面  
 時計と清吉  
 悪魔の敗北

中央公論 7  
 新時代 9  
 改造 9  
 文章世界 9  
 解 放 10  
 雄 弁 10  
 解 放 11  
 内外時論 11  
 サンエス 12  
 解 放 1  
 新公論 1  
 青年改造 1  
 内外時論 1  
 報知新聞 2  
 新時代 4  
 報知新聞 4  
 文章俱樂部 4  
 文章世界 5  
 文章俱樂部 5  
 新 潮 6  
 新 社 6  
 中央公論 夏臨

旅の一夜  
 観劇会  
 裏切られた人々  
 燃ゆる頭  
 その頃  
 大正十年(一九二一)  
 お沢とその良人  
 満たされぬを逆ふ  
 ステーションの哀愁  
 婚期を失ふた男  
 銭を拾はぬ話  
 妙な音  
 二階すまひ  
 河畔  
 温泉場の人々  
 お辞儀をされた男  
 赤シャツの仲間  
 地下室にて  
 大正十一年(一九二二)  
 生活の沼  
 女客  
 無事に帰つた叔母  
 破婚まで

太 陽 8  
 淑女画報 9  
 解 放 11  
 太 陽 11  
 新 潮 12  
 解 放 1  
 福岡日日 1  
 中央文学 2  
 新文学 2  
 我 等 3  
 太 陽 5  
 小説倶楽部 5  
 中央公論 8  
 淑女画報 9  
 我 等 10  
 中央公論 11  
 時事新報 11  
 工場主の娘  
 青い狸  
 幻滅後の新しい幻  
 大正十二年(一九二三)  
 豆腐屋の笛  
 ひとりことを云ふ男  
 素足で行く旅人  
 放浪者と恋  
 珍 客  
 のぼるへちま  
 初 老  
 二人の独身者を繞る縁談  
 第一号檻房にて  
 大正十三年(一九二四)  
 隣の嫁さん  
 素 描  
 花子の訪れ  
 女 車 掌  
 未解決のまゝに生きる  
 橋本氏の半生  
 悦びを持つ女  
 悦びを失ふた女  
 やきもち

太 陽 11  
 新 潮 12  
 中央公論 12  
 太 陽 5  
 文芸春秋 5  
 中央公論 夏増 7  
 文章倶楽部 7  
 新 潮 7  
 婦人公論 9  
 太 陽 9  
 中央公論 10  
 中央公論 12  
 我 観 1  
 新 潮 2  
 中央公論 3  
 主婦倶楽部 4・8  
 中央公論 6  
 中央公論 夏増 9  
 新 説 9  
 随 筆 9  
 文章倶楽部 11

大正十四年(一九二五)

朝子の経験

女理髮師

珍奇な艶福

結婚難

放浪物語

温泉場スケッチ

愚夫愚婦

大正十五年(一九二六)

妙ちきりんな話

旅人よ何処へ

客

第二温泉場スケッチ

耳

累

彼女は何を思ふたか

昭和二年(一九二七)

なりゆき

行く水

妻

センチメンタルな父

屏風

故郷なればこそ

軍港風景

彼はさう感じた

昭和三年(一九二八)

時雨晴れても

新開町スケッチ

奇遇

職工の宿

或る職工の手記

昭和四年(一九二九)

愛の十字街

ステーション附近

井沢氏の鼻の穴

不意に来た叔父

昭和五年(一九三〇)

父を嗤ふ

女装の男

女人八景

落花は泥土に

昭和六年(一九三一)

左傾鸞脊椎

煤酌疲れ

昭和七年(一九三二)

春景千歳川

苦楽  
女性  
12 11

新  
潮  
2 2

文章倶楽部  
2 2

文芸春秋  
5 5

文章倶楽部  
8 8

新  
潮  
10 8

報知新聞  
2-8

新  
潮  
3 3

文学時代  
8 8

新  
潮  
9 9

文学時代  
3 3

新  
潮  
5 5

報知新聞  
8 8

独立青年  
8 8

新  
潮  
3 3

報知新聞  
6 6

新  
潮  
5 5

オール読物  
5 5

昭和八年（一九三三）

愛憎無限

中央公論 2

七月の創作

新公論 8

昭和九年（一九三四）

早春挿話

報知新聞 2

※『新公論』には、この他嘉六の執筆と思われるものに、「十月の文壇」（大四・十二）、「十一月の文壇」（大四・十二）、「四月の小説」（大六・五）、「六月の文壇」（大六・七）などがあるが、いずれもXY、あるいはXY生の署名となつてゐる。

新公論 8

夜半の歌

中央公論 10

大正八年（一九一九）

新 潮 3

昭和十年（一九三五）

縁談讖悔

中央公論 5

よく動く目玉―葛西善藏氏の印象―  
断想漫言

読売新聞 9

悪魔の嫉妬

婦人公論 10

まれに見る立派な人―藤森成吉氏の印象―  
職工から身を起して

新 潮 10

昭和十一年（一九三六）

巷 艶 録

中央公論 5

嬉しく又悲しく―本年発表せる作品に就て―

新 潮 12

昭和十五年（一九四〇）

覆水の記

中央公論 6

私の創作の実際

文章倶楽部 1

昭和二十七年（一九五二）

老 残

中央公論 3

私の最近の感想―芸術家に対する私の疑惑―  
感じのまま

読売新聞 2  
文章世界 1-3

昭和二十八年（一九五三）

奇 遇

中央公論 2

正直者の手記

解 放 6

八つ手の蔭

中央公論 9

善悪は分らぬ―故岩野泡鳴氏に対する思ひ出―  
岩野氏と私

新 潮 6

昭和三十二年（一九五七）

王子権限抄

文芸復興 12

初恋の思ひ出

文章倶楽部 7

昭和三十三年（一九五八）

抗 議

文芸復興 6

一つの作品が出来上るまで  
小説家になつた動機  
九月の日記

文章倶楽部 7

〈評論・随筆・感想〉

大正六年（一九一七）

癖のある藤森成吉氏  
宇野浩二氏の文章

新 潮 10  
新 潮 11  
文章倶楽部 11

文壇の理想家

念を入れて書いた―本年発表せる作品に就て―

大正十年(一九二一)

解放 11  
新潮 12

回想記

蒟蒻の味  
そつとして生かして置いてくれ

大正十三年(一九二四)

文芸春秋 8  
文芸春秋 11  
中央公論 11

ゴオルキーの作の特色

学問のある人格の人として―相互印象豊島氏―

宮地氏―

中央文学 1  
文章俱樂部 1

動かぬ電車の中で

非手前味噌―大正十二年の自作を回顧して―

詩三篇

読んだものいろ／＼

新潮 2  
新文学 4

震災後一年の思ひ出―大震災一週年に面して―

現代の社会に於て如何なるものに興味慰安を求めて居るか

創作上の態度

創作百話

中央文学 5  
文章俱樂部 5

嬉しかつた批評―予が本年発表せる創作に就いて―

エンジンの歌

読んだものから

プロレタリアートの芸術

中外 8  
新 潮 9  
読売新聞 9.23 24

嬉しさ―私の初めて得た原稿料―  
覚え帳より

「三等船客」と「人さま／＼」

発表した作品―本年発表せる作品に就いて―

大正十一年(一九二二)

新潮 12  
新 潮 12

過去の印象  
思つたままを言ふ  
爽快なる氏の生涯―滝田穠蔭追悼記―  
相当力をこめた―私が本年発表した作品に就て―

早春十日

私と葛西善藏君

芸術に対する一考察

多少許せる作品―予が本年発表せる創作に就いて―

大正十二年(一九二三)

新潮 1  
文章俱樂部 4  
文章俱樂部 6  
朝日新聞 11  
新 潮 12

交友昔話  
私の囑望する新作家  
机上ユーモリスト―私が本年発表した創作に就て―  
昭和二年(一九二七)

私の余技娛樂に就いての趣味

文章俱樂部 1  
新 潮 12  
改 造 10  
文章俱樂部 4

机上ニューモリストの言葉

私の正しき記憶

文芸運動としての「奇蹟」同人の進出

大正年間に現はれたる作品のうち最も記憶に残れるもの

「居酒屋」の読後感

ありのまゝの話—一人一話—

態度を嚴肅にする意味に於て—現文壇と私の

立場—

掌の三つの筋

足の裏をきれいにする事

暑中日記

宮地嘉六君を論ず

あまり書けなかつた—私が本年発表した作品に就いて—

昭和三三年（一九二八）

早春の記

私の生活と芸術

私の三日間

室生犀星論

春暁の感

小寺菊子女史の作品を語る

国家の文芸家表彰に就て

新潮 1

文章俱樂部 3

文章俱樂部 3

文章俱樂部 3

文章俱樂部 3

文章俱樂部 5

文章俱樂部 5

文章俱樂部 5

新潮 7

文章俱樂部 8

新潮 9

新潮 11

新潮 12

文章俱樂部 3

文章俱樂部 4

文章俱樂部 4

文章俱樂部 4

新潮 5

新潮 5

新潮 6

新潮 7

すべては文学修業か—文学者と家庭生活—

たしかに病的だ—一人一話—

逝ける葛西善藏君

八月の日記

龍巻を見た

体験より得たるもの—私の小説作法—

柄にないおしやべりをする—私が本年発表し

た創作に就いて—

昭和四年（一九二九）

旋盤工時代—私の十七八九の頃—

私の一日

少し語り過ぎるか—昭和四年に発表せる創作評論

に就いて—

昭和五年（一九三〇）

春閑録

六月の感想

私の生活

お前はどこへ行く—昭和五年に発表せる創作評論

に就いて—

昭和七年（一九三二）

作家生活余談

昭和十三年（一九三八）

頼まれざる従軍記者

新潮 7

文章俱樂部 7

文章俱樂部 9

新潮 9

文章俱樂部 11

文章俱樂部 12

新潮 12

文章俱樂部 2

文章俱樂部 2

新潮 2

新潮 12

報知新聞 2

報知新聞 4

『新文芸日記』

新潮 12

文学時代 7

中央公論 9

